
魔法使いと風精霊

田中 2 3 号

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔法使いと風精霊

【Nコード】

N5884Z

【作者名】

田中23号

【あらすじ】

趣味は剣と弓と錬金、特技は魔力節約、最終学歴は王都魔道学院卒業。そんな魔法使いと、インチキ魔法で契約した高位精霊の物語。魔法使いと精霊がイチャイチャしたりしなかったりします。

プロローグ

木々に囲まれた街道を行く男が一人、のんびりと歩いている。

その静寂を破る言葉が響く。

「おい、お前！荷物と腰の剣をおいていきな！」

賊が3人道を塞ぐ。

しかし、道を行く男は止まらず進む。

「と、止まらなと切るぞ！」

賊は動揺しつつも男を威嚇する。

しかし男は止まらない。

「「うおおおお！」」

そして、とうとう賊は一斉に男に襲い掛かる。

それに対して男は腰の剣を抜かずに、手を賊に突き出して短く言葉をつむぐ。

「風よ、突き進め」

瞬間突風が吹き荒れ、賊はまとめて吹き飛ばされ、木々に打ちつけられ、昏倒する。

そして男は、何事も無かったかかのように、また歩き出した。

「俺、かっこよくね？」

第一話「魔法使いと精霊の関係」

先ほど、賊を倒した男、名をクリスと言う。

今クリスは、生まれ故郷へ続く道を歩いてる。

「かつこよさで言えば、29点ですね。ぎりぎり赤点。主の学院でのテストの平均点よりはましですね」

「な、なんだと……。俺のかつこよさも精霊にはつたわらんか……。嘆かわしいなあ。あとテストの点は言わないで……」

「精霊に伝わらないというか、人間にも伝わってなかったじゃないですか、可哀想な主、学院の創立記念パーティーも一人で……。あとテストが近づくという意味もなく掃除したり、趣味の錬金したりしてるから赤点なんですよ」

「あああああ！やめて、僕の心の柔らかいところを言葉のナイフで抉らないで！！あとテスト前にいつも二番目の趣味に走ってしまうのは病気なんだよ！なぜか一番目は気が引けてやれないんだ」

「まったく。そもそも主は格好つけずに、口を閉じていれば外見も悪くないのに。勉強もやればできるんですから。まあ、卒業できたのでよしとしましょう」

「フウリは俺の母親か！」

クリスと話しているのは、彼と契約した風の精霊、フウリだ。

「ほぼ無償で面倒を見ているという点では、母親と言ってもいいかもしれませんね」

「あはい。本当にすみません。未熟者で。けど、普通フウリ級の精霊と直で契約結ぶのは人間的にきついんですねー」

「クリスは、魔力節約の鬼ですが、魔力自体は一般人に毛が生えたくらいですからね。まあ、あなたの魔法は面白いので、契約に不満はありませんがね。本当に良く考え付きましたね、契約に節約魔法を組み込んで、精霊の魔力消費を抑えるなんて」

普通、精霊は魔力のある所にいて、上位の精霊ほど魔力の多い所にいる。

契約するためには、場所から精霊が受けている魔力以上の魔力を契約者が提供しないといけない。

精霊が合意すれば、魔力が少なくても契約できるが、その分精霊の格はおちる。

しかし、クリスは得意の節約魔法を契約魔法に組み込んでフウリに使い、提供する魔力は少ないのにフウリの格を落とさないという、半ば詐欺のような方法でフウリと契約している。

「いや、本当にできると思わなかった。内容を理解して契約してくれる精霊となると高位精霊だからな、下手したら不興かって死んだな！」

「私は大らかな精霊ですからね。有難く思ってくれていいですよ。そして余剰魔力を私に渡していいですよ？」

「ば、馬鹿言うな。余剰なんてあるわけないだろおお！いくら節約してるからって、あんた自分の格を考えろよ！！ほとんど限界値の魔力を提供してるんですだよ！？俺に干乾びろって言うのか！」

「うふふ、そんなこと言って。私知ってるんですよ」

「何をしってるんだ、性悪精霊！」

「まあ、性悪だなんて。ただ、前に拾った魔力を吸い取る指輪に、卒業試験前に鍊金を繰り返して、吸った魔力を蓄積できるようにしたでしょう？今主がつけてる指輪、おいしそうですね？」

精霊が人間と契約するメリットとして、人間の魔力は世界に漂っている魔力より、人間の感覚で言えば、美味しいのである。

「勘弁してください。ほんと。自分の使える魔力ほとんどないんです。塵もかき集めないと、鍊金も満足にできない可哀想な魔法使いになってしまいます。どうかこの指輪だけは・・・！」

「あらあら、仕方ない主ですねー」

「ありがとうございます、ありがとうございます！この恩は魔力量向上魔法ができたらお返しいたしますので」

「そもそもこの面白い契約は、その魔法を完成させるために精霊の魔力取り込みの仕組みを研究するためでしたね」

精霊は無意識に世界から魔力を吸収して段々と格を上げ、取り込める魔力も増えていく。

人間は魔力を少しずつ取り込み、上限まで溜め込んだら、なんらかの形で放出するまでは魔力を取り込まない。

、
クリスは、体に取り込む上限を精霊のように増やしていけないかと思ったのである。

「けど、なかなか研究も進まないまま卒業しちゃったからなあ」

「向こうでは、引く手数多でしたし、宮廷魔法院にも内々に推薦をもらってましたのにね」

「勘弁してくれ。あんなギスギスした職場。推薦貰った日にそれまで話したことない貴族がどの派閥に入れとか、半ば脅し気味に言ってくるんだぜ。ハニートラップまであるし、女性不信ですよ俺は」

「なら、あのままギルドで遺跡に潜ってもよかったじゃないですか。あと主は女性不信になっても意味がないでしょう、周りに元々いないんですから」

「あれはあくまでお小遣い稼ぎなの、なんでもかんでも師匠に面倒みてもらうわけにもいかないでしょ。あと推薦蹴ったら、女性どころか野郎もいなくなりました」

「一生の仕事にするには、リスクですからね、あの仕事も。まあ、他にもいろいろあったと思いますが、推薦蹴ったらそっちもなくなりましたよね」

「上に睨まれるとやばいってのは知ってたつもりだけど、平民にできる想像のさらに上のやばさだったんだよ！」

国の魔法関係の最高権力は、もちろん宮廷魔法院である。

「お陰で魔法学院卒業で無職ですからね、主。」

「先生たちの哀れみの目線が今でもトラウマです」

「私もひそかに哀れんでました」

「泣くぞ!!」

「はいはい、落ち着いてください、主。お師匠さまのところのは何で蹴ったんですか。いいと思うんですけどね、学院教師も」

「それこそ、師匠に迷惑かかるっしょ。宮廷魔法院に睨まれてる小僧なんぞが入ったら」

「迷惑かけるのはいまさらじゃないですかー。気に入らない貴族のお坊ちゃんをハメたときも、お小遣い稼ぎがばれたときも、お城に忍び込んだときも、推薦蹴ったときも、他にもいろいろ全部、後始末してくれたのはお師匠さまじゃないですか」

クリスの師匠は、魔法の名門貴族の家柄なのでいろいろなところに顔が利く。

「今思うと、学院で無茶苦茶してたから、学院でほとんど人がよってこなかったんじゃない」

「それはそうでしょう。挙句に私のような高位精霊連れますからね、怖がられますよ。テストの点があれでも」

「お、俺の青春が……。もう少しおとなしくしていればよかったのかあああ!!」

「主がおとなしくとか、無理がありますよ。まあ、けど、男友達なら結構いたじゃないですか」

「あいつらほとんど彼女やら許婚やらいたからなあ。友情より女を選びやがって……」

「それでパーティーではほとんど一人ぼっちでしたよね。だからってパーティー会場を事前に爆破しようとするのはどうかと思いますけど」

爆破は、土壇場で裏切り者が出て、未遂に終わった。

しかし、この計画への男性参加者が多く、学院ではそういった生徒への配慮も考えるようになったとか。

「嫉妬の炎が俺を狂わせるんだ……。あれは予想以上に人も集まって引けなくなったのもあるけどな」

「嫉妬するくらいなら、彼女を作ればよかったじゃないですか」

「簡単に作れるならそうしてるよ!!」

「主に気のある人もいたじゃないですか、あのショートヘアの金髪碧眼で、炎魔法が得意で、精霊とも契約してた……ような？」

「あいつの精霊はお前に怯えて、俺の前じゃほとんど出てこなかっ

たからな」

フウリは上位精霊の中でも最上位に位置されるほど高位な風精霊のため、中位、下位精霊は一緒の空間にいてだけでもその影響をもらうに受け、風と相反する土属性の精霊は消してしまうこともある。

「あと、あいつは男だ!!」

「え？」

「え？」

「まあ、主がそう言うならいいです」

「なんだその引かかるいい方！」

「気にしないで下さい、ところで主の生まれ故郷はまだですか？」

「なんと強引な話題変換。あと少し、この森越えればすぐ着くからおとなしくしてるんだぞ」

「なら飛んで行きましょうよ、主！」

「うーん、そうするか。そんな距離ないしな、森を突っ切ろう」

風精霊が契約者を飛ばしても、魔力はほとんどかからない上に、節約魔法で皆無とっていいほどの消費なので、節約の鬼であるクリスもフウリの提案に乗る。

クリスがどんどん浮き上がり。

そして、村まであと少し。

第二話「魔法使いの過去と白い風」

「よっと」

村の少し前で、ふわりと地面に降り立つクリス。

「浮いて村まで行けばよかったじゃないですか」

「おばか！そんなこと田舎の村でやったら、僕が村で浮いてしまうだろう！」

「何をいまさら。主は浮くの得意じゃないですか」

「学院でも好きで浮いてたんじゃないだよ！？」

「学院でも・・・？ああ、村でも浮いていたんですか」

「決らないでください・・・」

「そういえば、主の昔話を聞いた事がないですね」

「え、なに？聞きたい？」

「期待をこめた目で見ないでください。想像つくのでいいです」

「ひどくね？仮にも主だよ俺？」

「主は勘違いしていますね。そもそも人と精霊の契約は対等です、そして主のした契約ですと、私の方が若干上になります。主を主と

呼ぶのはただの趣味です、別に他の呼び方もできるんですよ、無職主。分かりましたか？」

クリスは契約魔法を弄る代わりに、クリスの魔力をフウリが好きに使っていいという条件をつけている。

ちなみに、フウリとの契約の維持でほとんどクリスの魔力はないのだが・・・

「え、あ、はい、すみませんフウリ様。お願いですから無職呼ばわりはやめてください、お願いしますお願いします」

「仕方ない主ですね」

「ありがとうございます。これから誠心誠意フウリ様に尽くさせていただきますとも！」

「その意気ですよ主」

フウリが胸を反らして尊大に告げる。

ちなみに、フウリは今人型である。

精霊は、格が上がってくると段々人型をとれるようになる。

大きさも、人間大から手のひらサイズまで変えることが出来る。

フウリ並になると、服なども魔力で形成できる。

「まあ、主の過去は特技から推察できます。弓が得意なのは、森で

狩猟をしていたからでしょう？」

「うん、畑耕すより向いてたみたいだから、狩のときはいつもついていった」

「で、剣が上手いのは騎士に憧れたからでしょう？王都でもすれ違うと目を輝かせて見てましたからね」

「あはい、ちゃんばらごっこで磨きました」

「ちゃんばらごっこであそこまでの腕になるのですか、さすが主。変なところで突きぬけてますね」

「あれ、褒められた・・・？」

「褒めてますよ、えらいえらい。それで、どうせ騎士になるんだーとか言っているも木の棒でも振り回して大きくなって、本当に王都まで行っちゃったんですね。可哀想に・・・。それは村でも浮きますよ」

現実を見ないといけませんよ、とフウリが続ける。

「あ、当たってる・・・剣買う余裕なんてなかったんだよ！木の棒で悪いか！」

「悪くは無いですけど、本当に木の棒で王都に行ったんですか・・・。ここ数日通った道、結構魔物いましたよね？」

「え、うん。木の棒で頑張った。で、王都目前で力尽きたところを、遺跡の研究に出てた師匠に拾われた」

「本当に馬鹿で可愛いですね主」

「やめて、生暖かい眼差しを送らないで・・・！」

「おっと、そろそろ村に着きますね。私はさっきから何か良からぬ気配がするので、ちょっと周辺の格の高い精霊に挨拶してきます」

「お、おい、なんだ良からぬ気配って。やばいのは嫌だからな！」

「主のやばいの基準が分かりません。遺跡であつた亡霊騎士はやばいに入りますか？」

「おいおい、あれはやばいってレベルじゃないだろ・・・。フウリと俺の剣技とこの剣があつて五分五分だったやないかい！・・・え、あれレベルの良からぬ気配なの？」

以前クリスが、師匠の手伝いで手付かずの遺跡に入ったときに、最下層で王の墓の守人の成れの果てである亡霊に襲われ、遺跡が崩壊寸前になるまで戦って、やっと倒したという事があつた。

ちなみにクリスの剣は、王都の古びた武器屋に行ったとき、小汚い樽に十把一絡げで売っていたものだが、魔力の流れがおかしいことに気づいたクリスがとりあえず購入して、遺跡マニアで古代魔法の数少ない使い手である師匠に見せたところ、所持者ではなく世界の魔力を吸引して吸引した分だけ切れ味がよくなり、斬撃を飛ばすことができるようになる、ということが発覚して、ボロボロだったのをクリスが得意の錬金で見栄えと切れ味をよくしたものである。所持者の魔力を吸ってなんらかの効果を得る魔剣というのは存在する

が、世界の魔力を吸って効果を得る魔剣というのは大変珍しいものである。

あと、魔法使いが武器屋に行くことなど滅多に無いのだが、クリスが自由にすることができるとお金を得て初めていったのが武器屋だ。木の棒を振り回すのは恥ずかしいということに、王都に来て少ししてやっと自覚したそうだ。

「そうですね、あれ並なら主の腕も上がってるし、剣の魔力も満ちてるのでそこまで苦戦しないと思うのですが」

「超不安です。師匠に連絡いれたほうがいいかな」

「王都出て一週間で、ですか？」

「は、恥ずかしい。師匠泣いて見送ってくれたのに。ちょっと俺には無理だわ」

「まあ、様子見だけでもしてきます。処理できそうなら処理しますし」

「うーい。お願いします」

「はい、お願いされました。それでは、危なくなるかもしれないので、少し頂きますね？」

「頂くって何・・・を!？」

クリスの唇にフウリのそれが重なる。

「ん……。ごちそうさまでした」

「おいましてその色情精霊」

「勘違いしないでください主。別に主に好意を持つての行動ではないですよ？ただ、魔力を頂いただけです」

「そんなことは分かってるわ！だけど別にその方法じゃなくてもいいだろ！？」

「はて？その方法とは？」

「い、いや、だから、き、き、キスじゃなくてもだな！」

「うふふ、純情ですね可愛い主。けど、これが効率いいんですよ、私にとっては」

「う、うそくさい。しかも指輪から魔力無くなってるんだけど、ねえ、なんでなんだよフウリィィィ！指輪から取るなら俺に接触しなくてもいいだろうが！！！」

「それでは見てきますので、おとなしくしてるんですよ主。あんまり騒いでると、ほら村の人も変な目で見てますよ」

「スルーするな！！お前のせいだ！！早く行って来い！！怪我すんなよ！！！」

「はい、それではまた後ほど」

そう言うと、フウリの体がふわりと浮いて段々遠ざかっていった。

「ふう、白……か……」

第三話「魔法使いは初代騎士団長」

けしからんフウリを見送ったクリスは、村の前まで足を運ぶ。

「お、おい、お前！さっきから一人で大声だしたりしやがって！怪しい奴は村には入れないぞ！」

ちょうど村の前で遊んでいた少年たちが声を上げる。

精霊は基本、ある程度魔力を扱える者にしか見えない。

よって、フウリと話しているクリスは独り言を言ってるように見えるため、学院外でもあまり人がよりつかなかった。

フウリ並の高位精霊なら、人に姿を見せることも簡単なのだが・・・。

「怪しいだど！こんなシテイボーイの俺を捕まえて怪しいだど！この田舎者が！お前じゃ話にならん！村長を呼べい！」

「ふ、ふざけやがって！この！！」

「おれたちにかなうと思うなよ！」

「ぼっこぼこにしてやんよ！」

「僕たちはトリエ村騎士団だぞ！」

「けどあの剣本物じゃない？やばくない？」

「ばっか、どうせ偽物だって」

「金持ちそうな顔じゃないだろ」

等々、少年たちは木の棒を振り上げて威嚇する。

「木の棒・・・それにトリエ村騎士団だと・・・。くそ！なんてことだ。俺の負けだ・・・。好きにしろ・・・」

少年たちが振り上げる木の棒を見て、がくりと膝をつくクリス。

ちなみに、トリエ村初代騎士団長はいま膝をついている。

「分かればいいんだ！」

「けどこの怪しい奴どうする？」

「自警団の兄ちゃんたちのところに連れてく？」

「兄ちゃんたち、村長の家に集まってたよな」

「よし！ついて来い！村長の家にいくぞ！」

結局、クリスは村の中に入れることになったようだ。

「よし、お前はここで待ってろよ！今兄ちゃんたち呼んでくるから」

そう言い残して子供たちは村長の家に入っていく。

「お前ら、何しに来た！今日は大事な話してるから、村の外で遊んでろって言っただろ！」

「ちがうんだよ兄ちゃん」

「怪しい奴を村の外で見つけたんだ！」

「それでみんなで捕まえて連れてきたんだよ！」

「凄いだろ！」

と、子供たちが自慢していたところに雷が一発入る。

「お前たちは！！また、そんな勝手なことして！！何度言えば分かるんだ！！村のお客さんかもしれないだろ！！それに本当に危ない奴だったら最悪死んでしまうかもしれないんだぞ！！」

実際、一度旅の商人を捕まえて、こっぴどく怒られているトリエ村騎士団員は顔を青くしたり、泣いてる子もいる。

「とにかく、その人のところにすぐ案内しろ！」

「う、うん。村長の家の前にいるよ」

「わしも行こう」

村長も立ち上がって家を出る。

自然、集まっていた大人が全員ついて行く事になる。

「おお！あなたが、うちの子供たちがいたずらしてしまった人かな？」

「あーそうですね、たぶん。きっと」

「ふむ。まことに申し訳ない。この通りじゃ！」

「本当にすまない！」

そう口々に言って皆が頭を下げる。

「あの、そのですね、気にして無いというか、遠く巡って俺のせい
というか・・・」

止められるのも無視して村を出た身であり、その後連絡もしなかった身であり、初代トリエ村騎士団長という身でもあるので、クリスのほうも気が気じゃない。

「おお！そう言ってくれますか！」

村長がぱっと顔を上げて喜び、頭を下げてた村の大人も顔を上げる。

「・・・あれ？」

「お？」

「んー？」

「おい」

落ち着いて見ると、村の闖入者がどう見ても見知った顔であることに皆が気づいてくる。

「お前、クリスじゃねえか！」

「おい、クリ坊か！」

「おおー、本当だ」

「人違いです」

即否定するも、皆聞く耳を持たない。

「心配させやがって！」

「生きてたのか」

「勝手に出て行きやがって！」

「マリアンさんもジョシュもずっと心配してたんだぞ！」

マリアンとはクリスの母の名前で、ジョシュは弟の名前である。

「俺も心配してたんだぜ、団長！ププッ」

「なんだ、初代じゃないか、頭下げて損したぜ」

初代団長時代の5年ほど前は、村の客人を罾に掛けたりと、もつとひどかった。

団長は年下の団員をこき使って、村の周りに罾を仕掛けまくっていた。

「お前の仕掛けた罾にはまって、一週間臭いがとれなかったんだぞおお！」

「で、騎士にはなれたのか？」

「なれてたらここにいないべ」

「結局戻ってきたのか」

「まあ、いま大変だし、若い働き手は居て困るもんでもないしな」

「てめえ、貸してた色本返せや！」

「お前が出ていってからリリスちゃんが元気なかったんだからなあああ！」

「くそ、もげろ！」

等々、熱烈な歓迎を受けるクリス。

そこに、後ろから声が掛かる。

「クリス！！！」

マリアンが大声でクリスの名前を呼び、駆け寄ってくる。

そしてその勢いのまま、あつい抱擁・・・タックルを繰り出す！
倒れたクリスに馬乗りになって殴るマリアン。

「このっ！馬鹿息子がっ！」

「おご、ちょ、あば、母、あが」

「おいおい、そんなにすると死んでしまうぞマリアン」

村長が見かねて止めに入る。

「チッ。命拾いしたわね！」

「それが息子に向けて言う言葉か！！」

「うるさい、馬鹿息子！5年も連絡なしで！どんだけ心配したと思っ
てんの！」

マリアンが涙目で怒鳴る。

「あー、いや。すみませんでした！」

クリスは勢いよく頭を下げる。

「もういいわ。殴ってすっきりしたし。ジョシュ置いて戻ってき
ちゃったから、とりあえず家で待ちましょ」

「はいさ」

「皆もお騒がせしてごめんなさいね。この馬鹿息子には、今度日を改めてちゃんと村長のところに挨拶させにいきますので」

「よいよい。積もる話もあるじゃろうて」

「さすが村長だぜ。あと村長の息子よ、色本は犠牲になったのだ」

「お、俺のお気に入りがあああああああ」

晴れ渡った故郷の空に次期村長の絶叫がこだまするのだった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5884z/>

魔法使いと風精霊

2011年12月19日23時05分発行